

浅間山の火山活動解説資料（平成 26 年 8 月）

気 象 庁 地 震 火 山 部
火山監視・情報センター

火山活動に特段の変化はなく、山頂火口から500mを超える範囲に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。ただし、山頂火口から500m以内に影響する程度の噴出現象は突発的に発生する可能性がありますので、火山灰噴出や火山ガス等に警戒してください。

平成 22 年 4 月 15 日に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを 2（火口周辺規制）から 1（平常）に引き下げました。その後、予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴煙など表面現象の状況（図 2、図 5 - 、表 1）

山頂火口からの噴煙量に大きな変化はなく、火口縁上の噴煙の高さは 50～100mで経過しました。

・ 山頂火口内及びその周辺の状況（図 3）

6 日に実施した山頂付近での現地調査では、山頂火口内の火口底中央部及びその周辺に引き続き高温領域¹⁾が認められ、これまでの観測（前回：7 月 9 日）と比較して、その温度や高温領域の分布に大きな変化はありませんでした。また、火口内の地形には大きな変化はなく、火口周辺に新たな噴出物も認められませんでした。

・ 火山ガスの状況（図 5 - 、表 1）

4 日及び19日に実施した現地調査では、山頂火口からの二酸化硫黄の放出量は、それぞれ 1 日あたり200トン（前月 7 月 8 日：90トン）とやや少ない状態でした。

・ 地震や微動の発生状況（図 5 - ～、図 6、表 1）

火山性地震は、やや少ない状態で経過しました。主な震源はこれまで同様、山頂火口直下のごく浅い所と推定されます。

火山性微動は少ない状態で経過しました。

・ 地殻変動の状況（図 1、図 5 - ）

山体周辺の GNSS²⁾連続観測では、2008 年 7 月初め頃から 2009 年夏にかけて深部へのマグマの注入を示す伸びがみられ、その後 2009 年秋頃からわずかに縮みの傾向がみられています。

傾斜観測³⁾及び光波測距観測⁴⁾では特段の変化は認められませんでした。

1) 赤外熱映像装置による観測。赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を検知して温度を測定する測器で、熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の温度よりも低く測定される場合があります。

2) GNSS（Global Navigation Satellite Systems）とは、GPS をはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。

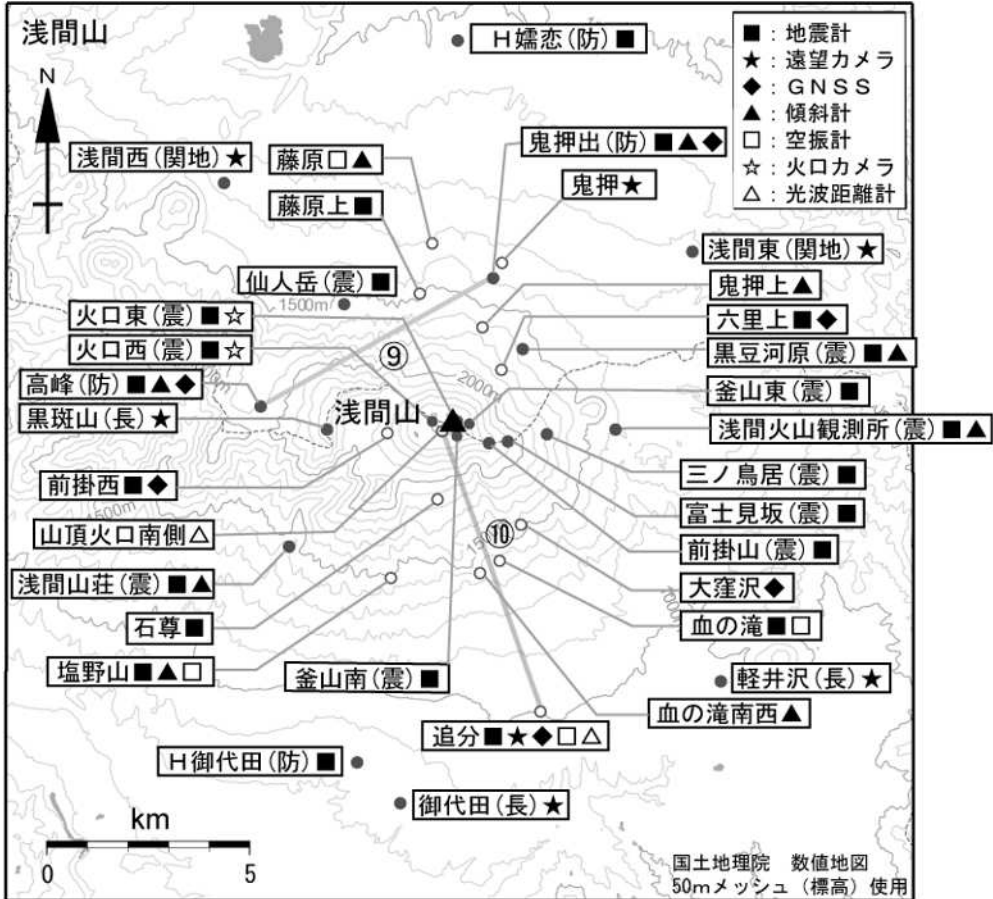
3) 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの注入等による変化を観測します。

4) レーザなどを用いて山体に設置した反射鏡までの距離を測定する機器。山体の膨張や収縮による距離の変化を観測します。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 26 年 9 月分）は平成 26 年 10 月 8 日に発表する予定です。

この資料は気象庁のほか、関東地方整備局、国土地理院、東京大学、独立行政法人防災科学技術研究所、独立行政法人産業技術総合研究所、長野県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50m メッシュ（標高）』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』を使用しています（承認番号：平 23 情使、第 467 号）。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所、(震)：東京大学地震研究所、
 (関地)：関東地方整備局、(長)：長野県

図 1 浅間山 観測点配置図

GNSS 基線 及び光波測距測線 は図 5 の 、 に対応しています。

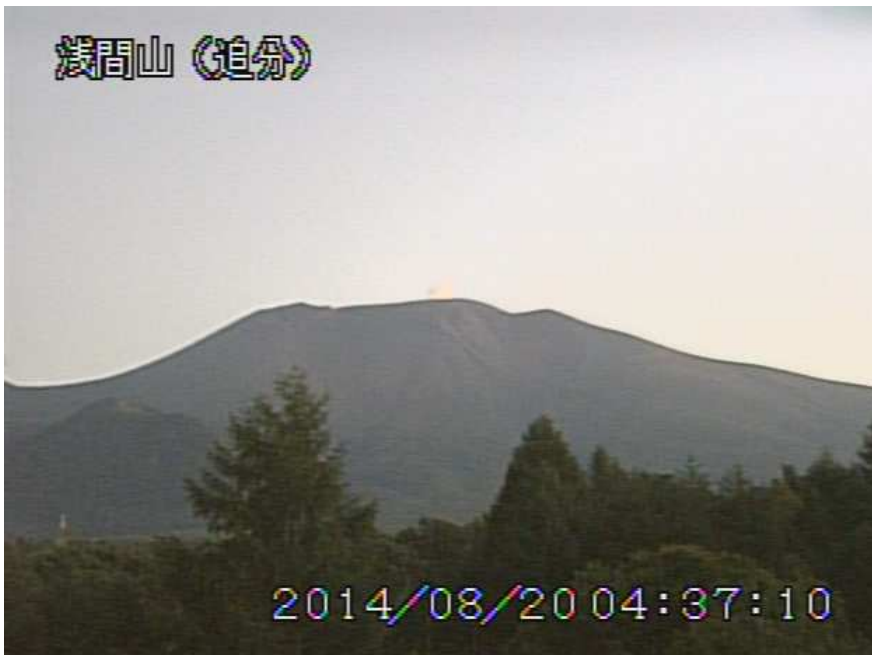


図2 浅間山 山頂部の噴煙の状況
(8月20日、追分遠望カメラによる)

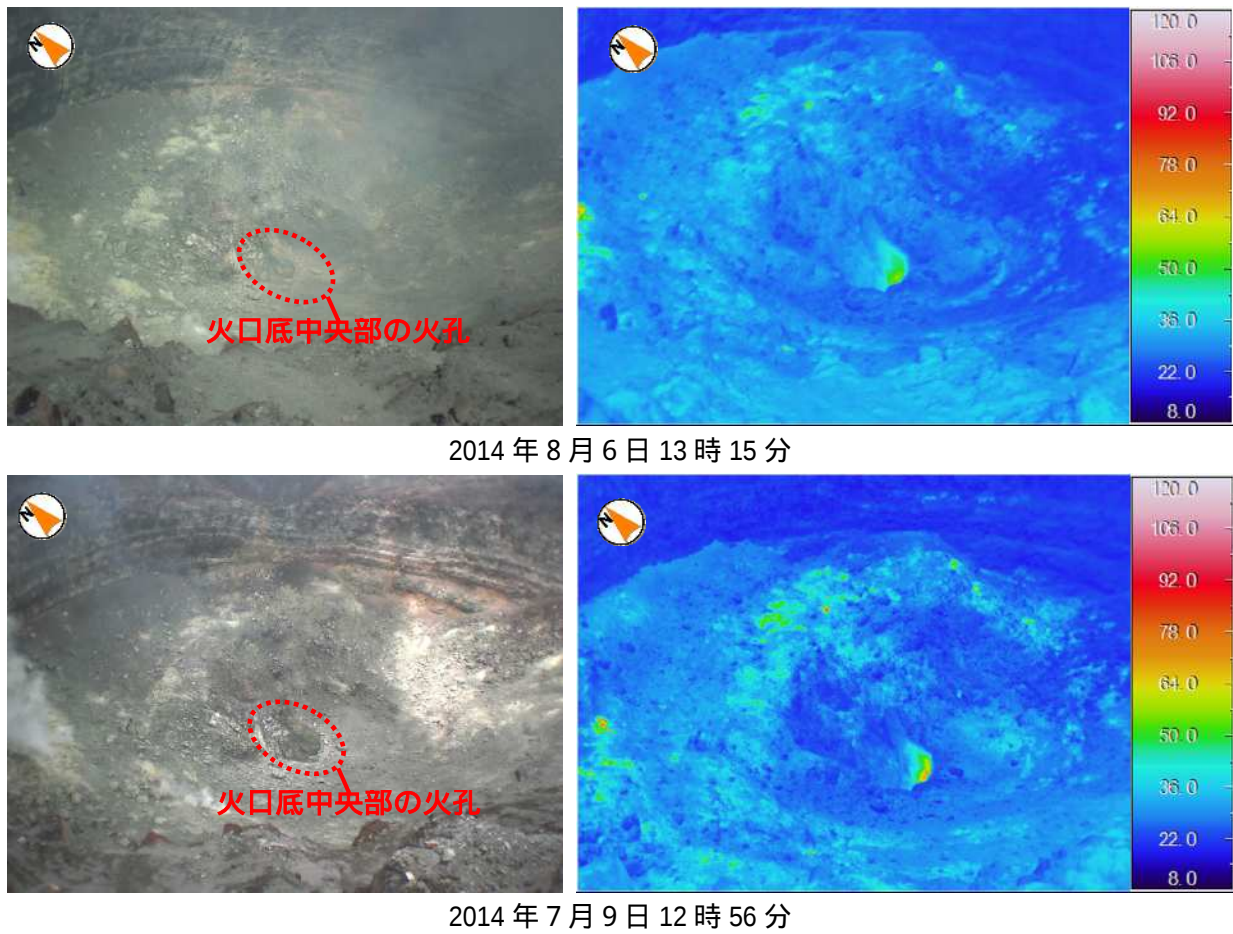


図 3 浅間山 山頂火口内の状況及び地表面温度分布¹⁾

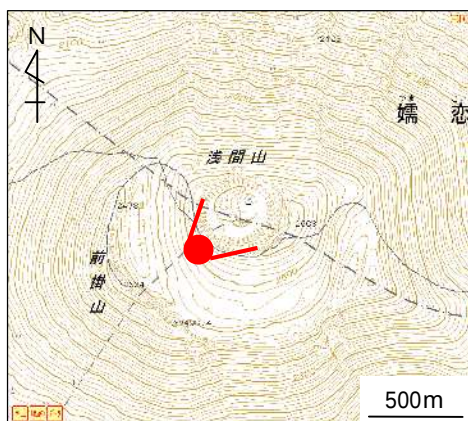


図 4 浅間山  : 図 3 のおよその撮影場所と撮影方向

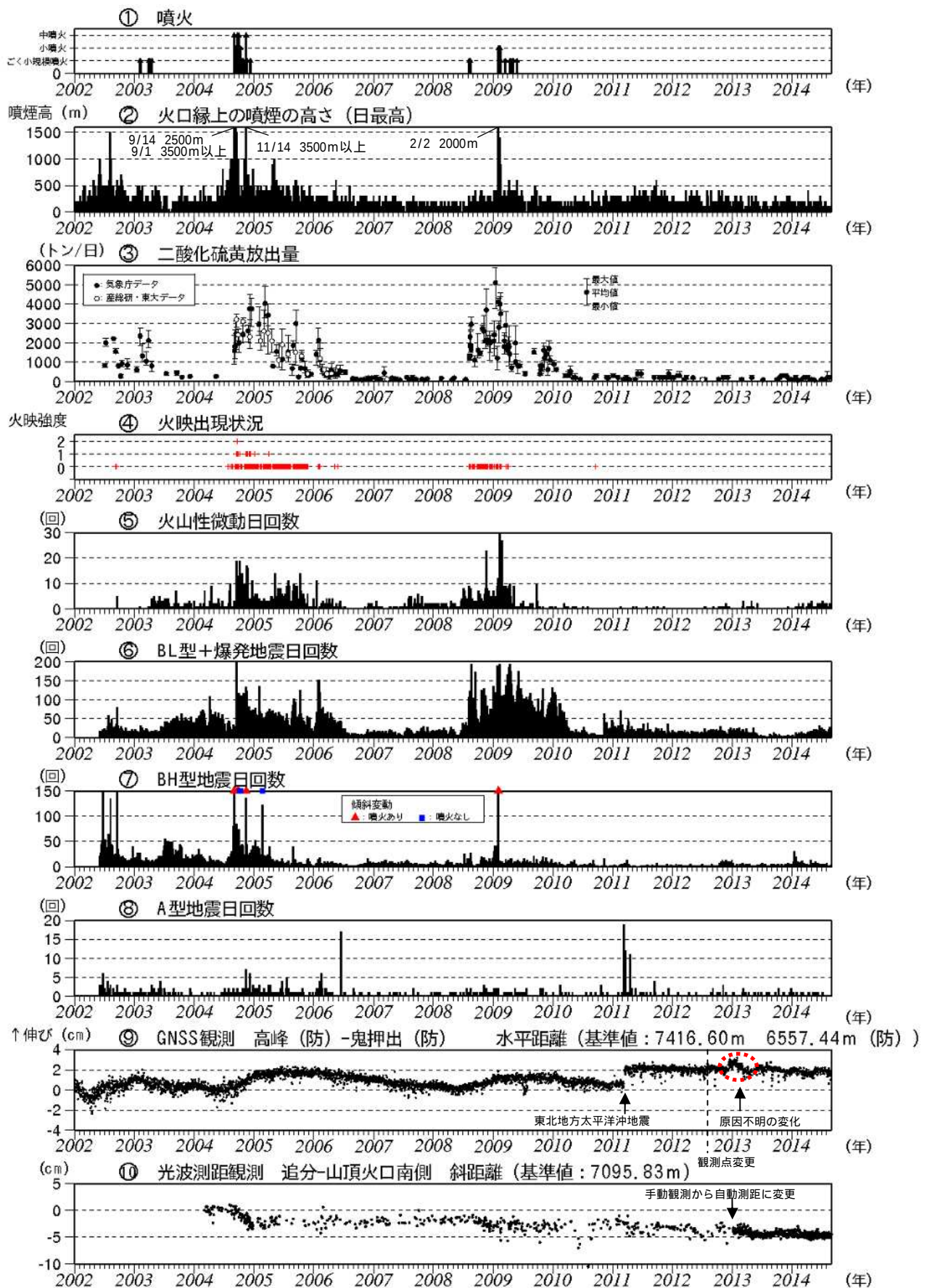


図5 浅間山 火山活動経過図 (2002年1月1日～2014年8月31日)

図の説明は次ページに掲載しています。

独立行政法人産業技術総合研究所及び東京大学による観測結果が含まれています。
6 ページの脚注 7) を参照。

- ～ 地震の種類別（図 7 参照）に計数を開始した 2002 年 6 月 1 日からのデータを掲載。
2002 年 1 月 1 日～2012 年 7 月 31 日 気象庁の高峰 - 鬼押観測点間の基線長。
2012 年 8 月 1 日以降 防災科研の高峰 - 鬼押出観測点間の基線長。
2010 年 10 月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。（防）は防災科学技術研究所の観測機器を示します。
2013 年 1 月より、手動観測から自動測距による観測に変更しました。

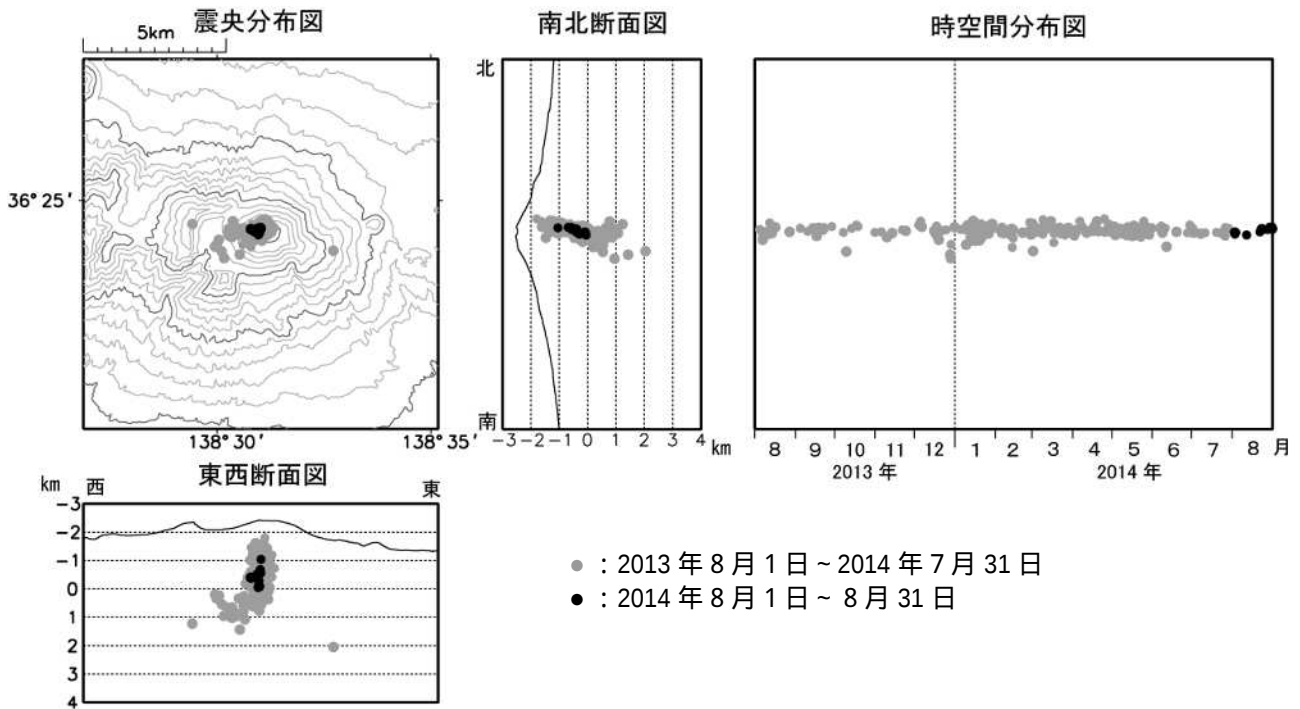


図 6 浅間山 震源分布図（2013 年 8 月 1 日～2014 年 8 月 31 日）

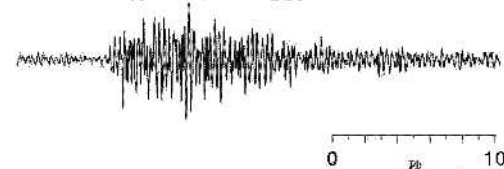
A型地震：P,S相が明瞭で卓越周波数は
10Hz前後と高周波の地震



BL型地震：P,S相が不明瞭で卓越周波数が
約 3 Hz以下の地震



BH型地震：S相が不明瞭で卓越周波数が
約 3 Hz以上の地震



EX型地震(爆発型)：爆発的噴火に伴って発生する地震

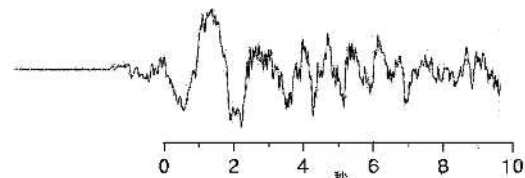


図 7 浅間山で見られる火山性地震の特徴と波形例

表 1 浅間山 2014 年 8 月の火山活動状況

8月	噴火 回数	火山性地震の回数 ⁵⁾					地震 合計	微動 回数	噴煙の状況 ⁶⁾		火映 強度 ⁷⁾	備 考
		A 型	B H 型	B L 型	E x 型	その他			日最高 (m)	噴煙量		
1日	0	0	2	13	0	0	15	2	50	1	-	
2日	0	0	2	7	0	1	10	0	-	-	-	
3日	0	0	7	12	0	0	19	0	-	-	×	
4日	0	0	0	12	0	0	12	1	×	×	-	二酸化硫黄放出量 200トン/日
5日	0	0	1	6	0	1	8	0	×	×	×	
6日	0	0	1	14	0	1	16	0	100	1	-	
7日	0	0	1	9	0	0	10	1	100	1	-	
8日	0	0	1	6	0	0	7	0	×	×	-	
9日	0	0	1	2	0	0	3	1	×	×	×	
10日	0	0	1	5	0	0	6	0	×	×	×	
11日	0	0	1	2	0	0	3	0	×	×	×	
12日	0	0	3	7	0	0	10	0	×	×	-	
13日	0	0	1	13	0	0	14	0	100	1	-	
14日	0	0	0	8	0	0	8	0	×	×	-	
15日	0	0	1	20	0	0	21	0	×	×	×	
16日	0	0	3	18	0	0	21	0	×	×	×	
17日	0	0	1	22	0	1	24	0	×	×	×	
18日	0	0	0	18	0	1	19	0	-	-	-	
19日	0	0	0	15	0	0	15	0	-	-	-	二酸化硫黄放出量 200トン/日
20日	0	0	1	28	0	0	29	0	100	1	-	
21日	0	0	0	24	0	0	24	2	100	1	-	
22日	0	0	1	16	0	0	17	0	-	-	-	
23日	0	0	1	14	0	1	16	0	×	×	-	
24日	0	0	0	16	0	0	16	0	×	×	-	
25日	0	0	0	26	0	1	27	1	×	×	×	
26日	0	0	2	21	0	0	23	0	×	×	×	
27日	0	0	2	17	0	0	19	0	×	×	×	
28日	0	0	2	23	0	0	25	0	×	×	×	
29日	0	0	1	21	0	2	24	0	×	×	-	
30日	0	0	0	12	0	0	12	0	×	×	-	
31日	0	0	4	9	0	1	14	1	×	×	×	
合計	0	0	41	436	0	10	487	9				

5) 火山性地震の計数基準は石尊観測点で最大振幅 0.1 μ m 以上、S - P 時間 3 秒以内です。
火山性地震の種類は図 7 のとおりです。

6) 噴煙の高さと噴煙量は定時観測（09 時・15 時）の日最大値です。噴煙量は以下の 7 階級で観測しています。
1：極めて少量 2：少量 3：中量 4：やや多量 5：多量 6：極めて多量
7：噴煙量 6 以上の大噴火。噴煙が山体を覆うくらい多く、噴煙の高さは成層圏まで達したとみられる
-：噴煙なし ×：不明

7) 火映の強度は以下の 4 段階で観測しています。
0：肉眼では確認できず、高感度カメラのみ確認できる程度 1：肉眼でようやく認められる程度
2：肉眼で明らかに認められる程度 3：肉眼で非常に明るい色で異常に感じる程度
-：火映なし ×：視程不良（夜間観測できなかった場合）